

風々々々

池部良



金之

池部良

著者略歴

1918年、東京・大森生まれ。1941年、立教大学文学部英文科卒業と同時に東宝文芸部に入社。島津保次郎に見いだされて俳優に転向。同年7月、「闘魚」で映画デビュー。戦前戦後を通じて二枚目スターとして活躍。代表作に「青い山脈」「暁の脱走」「雪国」「乾いた花」等がある。エッセイストとしても活躍、「風が吹いたら」「そして夢にはじまった」「そよ風ときにはつむじ風」等の著書がある。

風 クラシック

1996年3月20日 第1刷

著 者 池部 良

発行者 堤 堯

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京03(3265)1211(代)

印刷所 理 想 社

付物 凸版印刷

製本所 中島製本

万一、落丁・乱丁の場合はお取替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

© Ikebe Ryo 1996 Printed in Japan

ISBN4-16-351420-1

風
クラシック／目次

御寄進 9

恥骨 16

沈魚落雁 23

とっぴんしゃん 31

転た今昔の感 38

以毛相馬 46

又、来るの？ 54

恋文 62

AOCワイン 70

恐縮罷在候 78

海軍大尉夫人 86

日本が戦争に負けたわけ 94

変なものを持ち合わせて 102

特等席 110

祭礼 118

櫛風沐雨の人 126

拉麵 134

悩む

142

タクシー

150

髯を扱いて項垂れて

158

みそさざい

166

酔漬けの生首

173

同窓会誌

181

娘の写真、二十枚

189

漢学の臍物

197

一佐の娘

204

ハワイからの手紙
212

赤馬
220

古代日本人の壺
228

号泣
235

絶交
243

恩人、詐欺師、どっち
251

病は気から
259

蒟蒻玉
267

あとがき
275

初出誌「ノースサイド」一九九三年、月号、一九九五年十二月号

風
ク
ラ
シ
ッ
ク

A D · 坂田政則
装幀 · 村上 豊

御 寄 進

降りた目の前に、剃って青々とした坊主頭、白袴・墨染めの服、上に柿渋色の被布を着た妙恵さんが立っていた。

「ようこそ、お出で下さいましたわ」と両腕を広げ、大袈裟な挨拶をしてくれた。降りたところは新幹線・京都駅。晴れてはいたが、寒かった。

妙恵さんは尼さん。尼さんだから女性には違いないが、御本人も心得ているか、どうかは別として、女の「残んの香」が漂っている。

今は、四十三、四になるから、色気も残んの香になったが、二十数年前、家内の祖父の何回忌かの法要があつて、お坊さん方のすぐ後ろに坐らされたとき、妙恵尼の真後ろになった。祖父には悪いとは思つたが、永いお経に飽きて、妙恵尼の背中を何んとなく見ていたが、それも飽きて腰の辺りに目を移した。

網膜の中で、墨染めの衣を、一枚、一枚、剥いて行ったら、つるりとした白桃のようなお尻が現れた。こんな想像は、仏門の女性に、あまりにも非礼だし、あまりにもはしたないことに気付いたから、白桃を南瓜に変える努力をした。

妙恵尼さんは、亡くなった祖父と親交のあった某禪師げいか猊下の秘書を永らく務めていて、禪師猊下が御成仏されてから、古刹こさつではあるが、奈良の何んとかという村に在る小さな寺の住職、尼僧だから庵主をしておられる。

たった一人で仏様を護っておられる。にも拘らず、良い檀家が居られると見え、裕福とは言えないが、その日に困る暮らしではないようだ。お布施と茶道、手芸、ワープロ、書などを教えているから、まあまあのお金が入って来るわ、と言っていたことがある。

「貧乏なのよ。でも、お寺さんだから、お肉なんか食べないでしょ。だから、食費が安上がり、助かるわ。お坊さんになって、よかったと思うわよ。ほんと、ほほほ」と笑ったこともあった。妙恵尼は、そういう人だ。

半年ほど前、突然、妙恵尼から電話があつて、家内が受話器をとった。

「あなた。妙恵尼さんからだけど、奈良のお寺に、花の集まりとかいう檀家のご婦人ばかりの会があるんですって」

「だから、どうしたの？」と僕。原稿を書いている最中だから上の空で聞いた。

「だからって、これから話すんじゃない。よく聞いてよ。花の集まりの会で、あなたに講演してもらいたいんですって」

「昔からの誼よしみで、やることは吝やぶさかじやないが、妙恵さんのとこ、貧乏寺だって言ってたな。僕の講演料、最近、値上げして高たけえんだって言って、お断りしといてくれよ。お寺で講演なんて、ぱっとしねえもんな」

「そうお。でも、お寺は貧乏だけど、檀家には、バブルで大儲けしたお家が沢山あるから、絞り取れるのよ、って言ってたわ」

「絞り取った講演料ってのは、心痛むね。やっぱりお断りしてよ」

というのが経緯いきさつだったが、「池部さんの大ファンの方が、いっぱいいらっしゃるし、来て頂ければ、私の顔が立つのよ」と言うのに絆ほどされて、京都駅プラットフォームに立った次第。

「檀家の奥さんが車を持って来て下さってるから、それにお乗りになって」と言って妙恵尼さんは先に歩き出した。

付き人代わりの家内と肩を並べ、妙恵尼さんの後について行ったが、女の坊さんにくっついて行くなんて、スマートな光景じゃないなと思ひ、行き交う人の目が気になった。「あたし、六十九歳なんやけど、この通り元気ですわ。どうぞ安心なさい。お休みな

「って下さい」という白髪混じりのご婦人の運転で二時間余り走った。お休みどころか、怖くて、目を開けっ放しにしておいた。

行きついたところは竹藪と松の林に覆われた小高い丘の麓。茅葺き屋根のある小さな山門の額に、「解脱寺」と金箔の剥けた肉太の字が書かれてあった。

「池部さんも奥さまも、お腹がお空きでしようけど、ちょっと我慢して下さいね。今日はお正月八日、ほんとは昨日でしたけど、花の集まりの皆さんが、ほんものの七草を入れたお粥を御馳走したいとおっしゃっていますので、先に御講演をなさって頂くことにして」と妙恵尼が言う。

縁なしの近眼鏡をかけた目でちろりと僕を見て微笑んだ。

名僧・一休和尚は、忌まわしい五欲は自らの心に在るのであって、他人にその責を求めてはいけないと言うけれど、僕が今、五欲の内、何かを犯す気持ちになったとしても、妙恵尼の近眼鏡に責なし、とは考えられねえな、と思った。

本堂・須弥壇前の床には、老年・熟年の御婦人ばかりが、膝や腿をつき合わせて、ぎっちりと坐っていた。畳十畳ほどの床だから、人数にすれば二十人ぐらいのようだ。

「では、皆さま、仏様のお導きに依りまして、たばうの池部良さんにお出で頂きました」

た、ほうは、多忙のことか、待望の発音のし損ないか、と首を傾げた。

「池部さんは、皆さま、よく御承知のように、曾ての大二枚目スターでございます」

曾てはないだろう。現在だって、皺こそ増えているが二枚目であることに間違いはないし、マッカーサーじゃない。老兵は消え行くのみ、とは一言も言っていない。日頃、あまり意見の合わない家内だが、妙恵さんの、この一言は僕と同じ思いのようだったらしい。

「先生は、永い間、俳優をなされ、数々の映画に出演なさって、私達の紅涙を、むさぼられたものでございます」

紅涙は良しとしても、貪るは解せないことだった。絞られたものです、だったら解釈がつく、貪るじゃ、どうにも意味の取りようがない。

「先生の今日のお話は、お手元のワープロにもございます通り、ふんを弁える、というお題でなさって下さいます。ふん、というものは、ほんとに大切なものでございます。

これを身内に置いておくか、出しておしまいになるかでは……」

と妙恵尼さんが言ったところで僕は、腰かけていた椅子を引き、立ち上がった。

「庵主さん、お話し中、失礼ですが、あの、ふん、ではなくて、ふん、なんです」と言ったら、

「あら、あたし、ふんなんて申し上げました？ いやだわ、私としたことが。分、でございませよ。二枚目の池部さんに、大便のお話をして頂くはずはございませんものね。御免なさい。では、ということ、お話を伺いますが、池部さん、御講演時間のお約束は一時間半でございましたが、三分でも五分でもよろしゅうございますわ。皆さん、先生のお顔さえ拝めれば、それでよろしいんですって」

と言ってテーブルの前から退き、僕と交替した。

「分を弁える」。この事は、かねてからの僕の主張だから、気を張って、時間目いっぱい話すつもりでいたのだが、三分でも五分でもよろしい、と言われ、どうやらあ、そんな短い時間にまとめられるんだ、とひどく悩んでテーブルに両手をついた。

「えーえ、俳優は俳優の、奥さんには奥さんの、役目というものがあります。政治家は政治家という国の下男としての責任があります」と言って腕時計を見たら、早くも四分二十秒経っていた。

最前列にいた腰の折れたお婆さんが、手を挙げ、「七草粥を作ろうと存じます。厨の方へ行かせてもよろしいか」と言った。

講演はそこで打ち切ることにした。

本堂に続いている八畳ばかりの板の間で、お碗を添えた七草粥を御馳走になる。